

よくきいて、あてよう

「わたしは、なんでしょ」

新しい指導を考える会

■教材について

本教材「わたしは、なんでしょ」(一下)は、「話す力・聞く力」とともに「話し合う力」を身につけることをねらう教材である。本教材までに、「たんけんしたよ、みつけたよ」「すきなもの、おしえて」「みんなに、しらせたい、こと」などの教材で、子どもたちは「話す力・聞く力」を身につけてきている。本教材では、これまでに身につけてきた力を高めながら、「話し合う力」を重点化して身につけることができるように指導したい。子どもたちが「話し合う力」を身につけることができるように、本教材では、クイズを出題して、質問したり応答したりする言語活動が設定されている。(以下、この言語活動を「クイズ」とする。)そこで、「クイズ」と「話し合う力」とのつながりを、とらえておくことが必要となる。

「クイズ」は、まず何よりも、正解を求めるという強い目的意識に支えられた言語活動である。そのため、一人の子どもが聞き手と話し手の立場に交互に立ち、必然的に質問したり応答したりすることになるので、話題に沿って話し合う活動が活発に展開されることが期待できる。

を「クイズ」にするかということになり、本実践では、四月から読み聞かせをしてきたお話の登場人物を話題に設定した。設定した理由の一つには、子どもたちの、お話を読むことへの興味・関心の高さがある。子どもたちは、お話の中の言葉一つ一つにしっかりと耳を傾け、つぶやいたり表情を変えたりして、お話の世界を楽しんでいる。本実践での「クイズ」が、「話すこと・聞くこと」だけでなく、「読むこと」への意欲を高めることにもなると考えた。

設定した理由のもう一つには、すでに読み聞かせをしたお話なので、どの子も、お話の内容を知っているということがある。出題の範囲が決まり、出題者も解答者も、「最後には正解がわかるだろう。」と楽しみにしながら、話題に沿った話し合いが展開できると考えた。

ほかにも、学校探検や町探検で見つけたもの、秋探しや冬探しで見つけたもの、先生や友達などを話題にしたものなどが考えられる。いずれにしても、子どもの日ごろの興味・関心や、これまでの学習経験や学習内容、他教科等との関連などをとらえ、「クイズ」への目的意識を高める話題を設定したい。

〈話し合いを意識したクイズ作り〉

子どもたちは、これまでに、順序を考えて相手にわかるように話すことを学習してきた。「たんけんしたよ、みつけたよ」では、どこで何を見つけたのか、「すきなもの、おしえて」では、何が好きなのか、事柄の順序を考えて話す学習をした。また、「みんなに、しらせたい、こと」では、行動の順序を考え

また、「クイズ」は、質問したり応答したりしながら、少しずつ正解がわかってくる過程を楽しむ言語活動でもある。正解がすぐにわかったり、最後までわからなかったりすることがないように、出題し、前の質問や応答の内容を受けて次の質問や応答をすることになり、子ども自らがやりとりが続くように協力する、話し合う活動が展開されることが期待できる。

このように、「クイズ」を通して、一人一人に確かな「話す力・聞く力」をつけさせるために、目的意識を高めて話題に沿うようにし、やりとりが続くような出題、質問や応答の内容を考えるよう指導することが大切になる。

■指導の計画(五時間)

- 第一次(二時間) 教師が出題するクイズに取り組み、クイズを作って出し合う計画を立てる。
- 第二次(二時間) クイズの作り方を知り、クイズを作る。
- 第三次(二時間) クイズを出し合う。
- 第四次(二時間) 活動を振り返る。

■一人一人に確かな「話す力・聞く力」を身につけさせる実践事例

〈目的意識を高める話題の設定〉

一人一人に確かな「話す力・聞く力」を身につけさせるためには、「話し合い」「聞きたい」「話し合いたい」という思いがもてる話題を設定しなくてはならない。ここでは、どのような話題

で話す学習をした。

本実践の「クイズ」では、登場人物の様子や言動、気持ちなどがヒントとなる。したがって、出題者は、これらの事柄の順序を考えて話すことになる。そして、話し合いが楽しく続くように、正解がすぐにわからないヒントの順序を考えて、解答者にクイズを出すことになる。つまり、これまでに身につけてきた、事柄の順序を考えて話す力を高めつつ、話し合いを意識して話すことで、「話し合う力」を身につけるようにする。

まず、これまでに教師が出したクイズをもとにして、登場人物の様子や言動、気持ちなどをヒントにすることを確認した。そして、作ったヒント一つ一つを、一枚一枚のカードに書くようにした。どのヒントを出すかを選んだり、ヒントを並べ替えて順序を考えたりする活動ができるようにしたいと考えた。

次に、どのような順序でヒントを出したらよいかを確認した。解答者の表情から、ヒントの順序を、以下のようにネーミングし、二つの型を意識して順序を考えるようにした。

・「ここにこ・ええっ」型(やさしいヒント↓難しいヒント)

その後、友達と試しの「クイズ」をし、正解がすぐにはわからないようなヒントの内容と順序になっているかを確かめ合った。

○ヒントを作ることが難しい子どもに

教師が、登場人物の特徴について質問しながら、お話を読み返すようにした。そして、教師が質問した内容の中から、ヒントを選んでカードに書くようにした。

子どもAと教師のやりとり

T…くろいうさぎは、お話の中でどんなことをするの。
A…とんだりする。
T…どこに書いてあるの。見つけて読んでごらん。
A…(書いてある文章を読む)
T…今、読んだところで「とんだりする」という言葉に似ているのは、どの言葉かな。
A…「とびこえました」。
T…よく見つけられたね。どこをとびこえたの。
A…しろいうさぎの上。(以下略)

子どもAが作ったヒント

A わたしは、ねがいごとをしたら、かないました。
I わたしは、かなしいです。
U わたしは、ともだちのうえをとびこえます。

「クイズ」での子どもの話し合い

A…問題です。わたしは、友達の上をとびこえます。わたしは悲しいです。わたしは、だれでしょう。質問はありますか。
C…あなたには、長い耳がありますか。
A…あります。
C…あなたと友達で何人ですか。

「クイズ」での子どもの話し合い

B…問題です。わたしは、強い生き物です。わたしは、ゆびきりをします。わたしはだれでしょう。質問はありますか。
C…あなたの好きな食べ物は何ですか。
B…木によくあるものです。
C…動物か、人間か、虫か、どれですか。
B…林によくいる生き物です。
C…あなたは、どんな形をしていますか。
B…(指で示しながら) こういう形をしています。
C…あなたは『くわがたむし』の、のこぎりくわがたですか。
B…違います。
C…あなたは、『カブトくん』のカブトくんですか。
B…正解です。わたしは、『カブトくん』のカブトくんです。
わたしは、最後に、「またいっしょに遊ぼうね」と、こんにちはとゆびきりします。

話し合いを意識した質問や応答

質問したり応答したりしながら、少しずつ正解がわかる過程を楽しむために、正解が容易にわかる時には確信がもてるような質問をし、正解が容易にわからないときには新しいヒントになるような応答をするように促した。

例えば、子どもAの「クイズ」では、正解を予想した子どもは「あなたは動物ですか。」と質問するのではなく「あなたには、長い耳がありますか。」と、登場人物の様子について具体的に質問した。子どもAから「あります。」と応答されたことで、

A…二ひきです。
C…あなたの好きなものはなんですか。
A…たんぼぼです。
わたしはだれでしょう。
C…あなたは『しろいうさぎとくろいうさぎ』の二ひきですか。
A…二ひきの、どちらですか。
C…しろいうさぎですか。
A…違います。
C…あなたは、くろいうさぎですか。
A…正解です。わたしは、『しろいうさぎとくろいうさぎ』のくろいうさぎです。

○ヒントを多く作ることができる子どもには

考えたヒントをすべてカードに書いてから、ヒントを選択したり順序を考えたりするようにした。

子どもBが作ったヒント

A わたしは、つよいいきものです。
I わたしは、大きくなります。
U わたしは、ゆびきりをします。
E わたしは、いえにかえります。

質問した子どもは、自分の予想に確信をもつことになった。このような質問の内容について、「正解だと思う登場人物の様子を思い浮かべて、その様子を入れて、くわしく質問すると、正解かどうか確かめられますね。」と価値つけた。

■実践を振り返って

第四次の活動の振り返りでは、「難しい問題や簡単な問題があって楽しかった」「聞いたり話したりするのが楽しかった」「またやりたい。今度は、○○のお話で、クイズを出したい。」などの感想が出された。そこで、朝の会で、日直の話の話題に加えることにした。お話の登場人物だけではなく、身の回りのものをクイズにしてもよいことにした。すると、「問題です。わたしは、押すと音が出ます。黒と白の固い洋服を着ています。わたしは何でしょう。」(正解はピアノ)などのクイズを出す子どもも見られるようになった。

本実践での指導を振り返り、一人一人に確かな力を身につけさせるためには、教師が、身につけさせたい力を明確にすることが不可欠だと感じた。「話す力・聞く力」といっても、「話す力」「聞く力」「話し合う力」のどの力を重点化するかによって、重ねて指導する内容もあれば、新たに指導する内容もある。

また、国語科学習での指導内容を定着させるためには、日常生活の中で、その内容を使うことが不可欠だとも感じた。国語科での学習を点とするならば、日常の実の場が線となる。点と点を線で結びながら、力を高めるよう指導していきたい。